



食道がん、飲酒少量でもリスク

神戸新聞 2025. 8. 10 「からだ」より

●アセトアルデヒド蓄積が関係

少量の飲酒で顔が赤くなる人は特に発症リスクが高いといわれる食道がん。その仕組みを動物実験で解明した京都大学医学部附属病院腫瘍内科の武藤学教授に予防法などについて聞いた。

●毒性強い発ガン物質

アルコールが肝臓で分解されてできるアセトアルデヒドは、毒性の強い発ガン物質だ。アセトアルデヒドは通常、ALD2という酵素によって無害な酢酸と水に分解される。また、アセトアルデヒドによって食道粘膜のDNAが傷ついても、がん抑制遺伝子であるTP53などがそれを修復する。

日本人を含むアジア人3～4割は遺伝子変異で生まれつきALD2の働きが弱く、飲酒するとアセトアルデヒドの影響で顔や体が紅潮したり、頭痛や吐き気がしたりする。ALDH2の機能が低い人は長期にわたる飲酒によって食道がんの発症リスクが高まるだけでなく、食道内に多発することが以前から知られていたが、メカニズムは不明だった。

武藤教授らは動物実験で、ALDH2の機能が低いと、飲酒とTP53の変異の組み合わせによって、将来がんになる可能性が高い前がん病変と食道がんが多発することを突き止めた。

人間でも「飲酒によって食道粘膜に将来がんになるリスクの高い前がん病変ができやすくなり、禁酒すれば前がん病変は改善し、食道がんの抑制につながると考えられます」と武藤教授は説明する。

●「百薬の長」ではない

厚生労働省は、「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」で、少しでも飲酒すると食道がんの発症リスクが高まるとのデータを示している。以前は、「酒は百薬の長」とされていたが、今では間違い。飲酒を習慣にしている人は食道がんに注意が必要だ。

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198